



「あまおう」9月の管理

南筑後・久留米普及指導センター
福岡大城農業協同組合

10a 当たり収量 5t 以上を目指しましょう

「営農情報」は、JA福岡大城のホームページで公開されており、過去の資料もご覧になれます。

JA福岡大城 営農情報 [検索](#)

現在の生育状況

(1) 子苗の生育

7月前半には、6月下旬～7月上旬の大雨の影響で根傷みした苗が多く見られました。梅雨明け（7月25日）後は、根傷みは回復に向かいましたが、降雨により肥料が流亡したところもあり、7月中旬～8月上旬に体内窒素不足の苗が多く見られました。窒素不足の苗は、生育が抑制されており、苗は全体的に昨年と比べると小ぶりです。

7月下旬～8月上旬に不時出蕾が見られました。6月上旬の低温と体内窒素不足が重なったことが原因と考えられます。

冷蔵庫入庫前の体内窒素濃度は、平年よりも低下していました。一部では窒素不足の苗が見られる一方、窒素過剰の苗もあり、バラついていました。

(2) 病害虫の発生状況

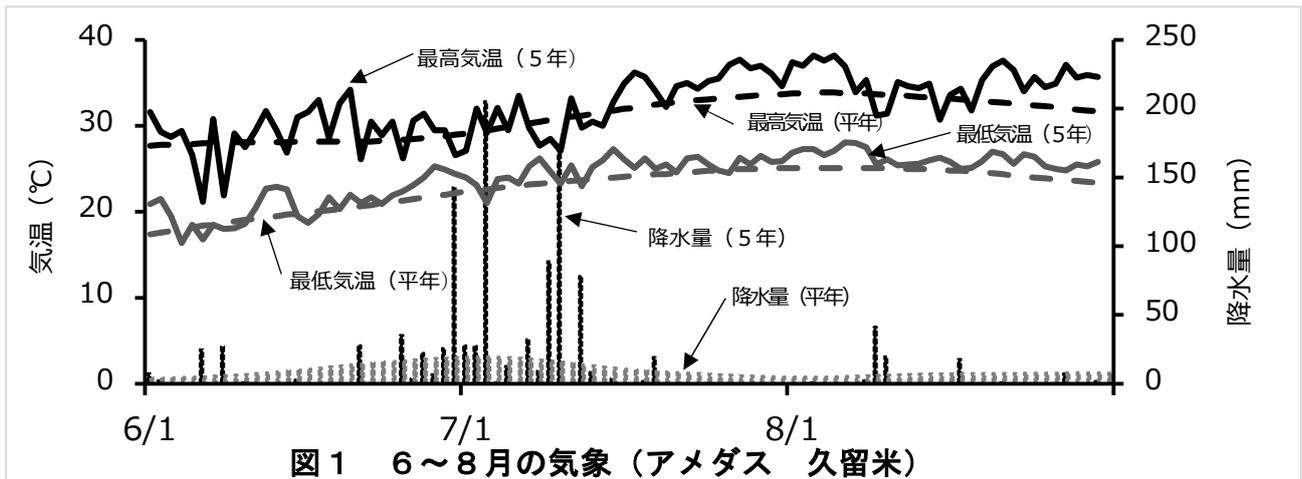
6月下旬～7月上旬の大雨の後に炭疽病が急速に拡大し、8月になっても増え続けています。発病状況は個人間差が大きく、これは親株の潜在感染状況及び6月下旬～7月上旬の防除頻度の差に起因するものと思われます。

また、育苗床で萎黄病が発生しているところもあります。

梅雨明け後は、高温乾燥が続いているので、ハダニ類及びアブラムシ類が増加しています。

気象の経過 (図1)

6月中旬以降、高温傾向が続いている。7月25日に梅雨明けした後は、気温が、特に、高く推移した。6月下旬～7月上旬に大雨があり、苗が浸水したところも発生した。



気象予報と今後の見通し

【今後の気象予報】

〔九州北部地方の1か月予報〕(予報期間：8月26日～9月25日 8月24日 福岡管区气象台発表)

○向こう1か月の気温は、暖かい空気に覆われやすいため高く、特に、期間の前半はかなり高くなる可能性があります。

○期間の前半を中心に気圧の谷や湿った空気の影響を受けやすいため、向こう1か月の降水量は平年並か多く、日照時間は平年並か少ないでしょう。

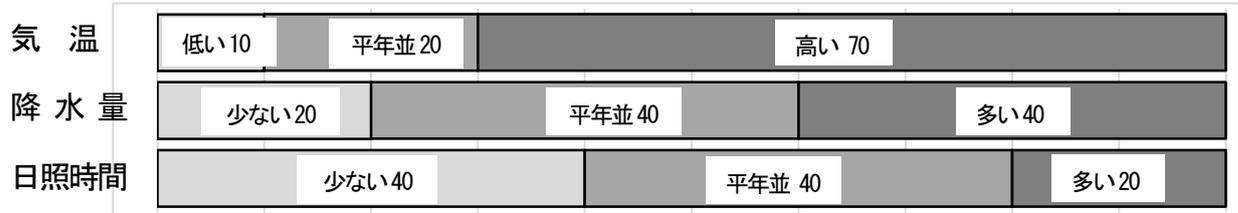


図2 九州北部地方における向こう1か月間の天候の見通し

表1 週別の天候・平均気温

	8/26～9/1	9/2～9/8	9/9～9/22
天候	高気圧に覆われて晴れる日がありますが、湿った空気の影響を受けやすいため、雲が広がりやすく、雨の降る日もあるでしょう。	気圧の谷や湿った空気の影響を受けやすいため、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。	平年と同様に晴れの日が多いでしょう。
平均気温	低10 並30 高60% 高い見込み	低10 並30 高60% 高い見込み	低10 並30 高60% 高い見込み

【生育の見込み】

9月の気温が平年より高く推移すると見込まれることから、普通ポットの花芽分化が例年より遅くなるおそれがあります。

また、気温が高く、降水量が多いと見込まれるので、9月に入っても炭疽病が拡大するおそれがあります。発病株の除去と薬剤散布に努めてください。

9月の管理目標

- ・普通ポットでは、定植前の寒冷紗被覆や短期株冷により、1番花房の分化を促進する。
- ・必ず花芽分化を確認して、最適な分化ステージで定植する。
- ・定植後には1日に2～3回かん水して、活着を促進する。
- ・早期作型では、寒冷紗被覆等により、目標とする時期に2番花房を分化させる。
- ・定植後から病害虫防除に努め、本田でのうどんこ病、炭疽病、ハダニ類の多発を防止する。

育苗管理（普通ポット）

- 窒素が切れすぎると1番花房が分化しにくくなり、また早進株や2番果房の芽なし株が多くなるので、最終追肥後、体内窒素(硝酸イオン)濃度が50～100ppmを下回る場合には、窒素を含む液肥を葉面散布する(例:OKF-1 1,000倍、メリット青 500倍等)。極端に切れている場合には、OKF-1 1,000倍、キッポ青500倍等をかん注する。
- 9月の気温は平年より高く推移すると予想されており、花芽分化が遅れるおそれがある。定植前に必ず寒冷紗で遮光する。また、個人予冷庫を活用して短期株冷を取り入れる。

定植

- 早い作型ほど定植時期の気温が高いため、早期作型では、定植前に寒冷紗で被覆し地温を下げておく。定植後5～7日間はそのまま寒冷紗被覆を続け、活着促進・根傷み防止を図る。苗が活着したら、株づくりのために寒冷紗を除去する。
- 普通作型では、定植後の寒冷紗被覆は行わない。
- 条間は55cmを目安にし、狭くならないように注意する。
- 株間は、土耕栽培で25cm、高設栽培で20～23cmを目安にする。
- 定植前には必ず花芽検鏡を行い、最適な花芽分化ステージ（表1）になってから定植する。特に、早期作型では厳守する。
- 早い花芽分化ステージでの定植は、生育が旺盛になりすぎ、出蕾の不揃いや乱形果の発生及び2番花房の分化の遅れの原因となる。
- 深植えすると、生育不良になりやすいため注意する。

表1 定植日と花芽分化ステージの目安

定植日	花芽分化ステージ
9月10～14日	分化～ガク片形成
9月15～18日	分化～ガク片形成
9月19～22日	分化
9月23日～	肥厚後期

定植後の管理及び2番花房分化対策

◎早期作型

生育が旺盛になりやすく、2番花房の分化が遅れやすい。

令和3年産において次のところで、2番果房の出蕾時期が早い傾向が見られた。

- ①定植時期が遅いところ ②遮光率が高い寒冷紗で被覆したところ ③2番花房の花芽分化後にビニル被覆したところ

● 寒冷紗被覆

2番花房分化対策のため、9月25日以降に寒冷紗を再被覆する。

寒冷紗被覆期間の目安:9月25日～2番花房分化確認まで
今年度は、気温が高く、2番花房の分化の遅れが見込まれるので遮光率が高い寒冷紗(表2)で被覆する。

表2 寒冷紗の種類と遮光率

種類	遮光率
シルバー寒冷紗109番	39%程度
黒寒冷紗600番	51%程度
黒寒冷紗610番	58%程度

● かん水

定植直後は、気温が高く、晴天日が多いと見込まれている。活着までは畝が乾かないように充分かん水を行う（1日に2～3回）。株元が湿るように注意してかん水する。

2番花房分化に向けて徐々にかん水量を減らす（図3）。

活着後は、かん水量をやや控えるが、控えすぎると生育が遅れ、収量が低下するので注意する。

● その他

マルチ被覆後は、地温抑制のためマルチの裾を畝の肩まで上げておく。

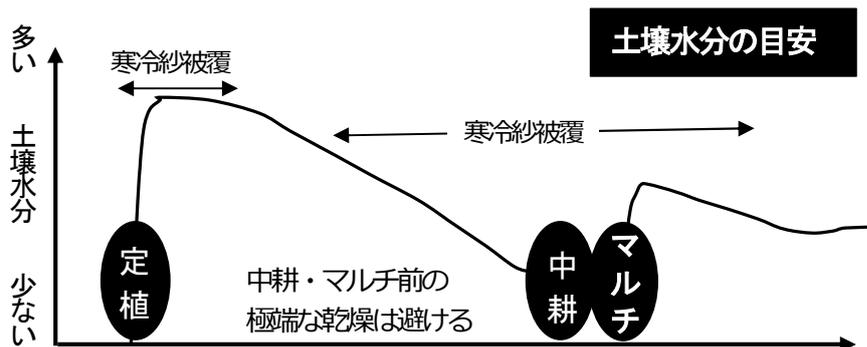


図3 定植後のかん水管理（早期作型）

◎普通作型

- 十分なかん水等により生育促進に努め、寒冷紗遮光等の2番花房分化対策は行わない。
令和4年産では、10月の乾燥により、早進株や生育不足が発生した。
- 定植直後から畝が乾かないように充分かん水（1日に2～3回）し、活着を促進する。
- 活着不良などで生育が悪い場合は、液肥のかん注・葉面散布での施肥やマルチ・ビニル被覆時期を早めることなどで生育促進に努める。

葉かぎ

- 葉かぎは、定植後20日以上たってから開始する。

病害虫防除

- 病害では発生前の予防散布を、害虫では発生初期の防除を徹底することにより発生を抑える。
- 定植後の薬剤散布は、苗が活着してから始める。

【炭疽病】

- 育苗期に多発しているところが多い。8月にも増加しており、本田で多発のおそれがある。
- 発病した苗及び周囲の苗（半径1mを目安）は育苗床から除去する。
- 定期的な予防散布及び降雨前後の薬剤散布を徹底する。
- 定植後に発病株を確認した場合は速やかに除去し、予備苗による植え替えを行う。
- 定植後に多発した場合には、できるだけ遅くビニルを被覆する。または、サイドの閉めこみを遅くする。
- 育苗期に多発したところでは、育苗株を親株とせず、無病の苗に更新する（秋ランナー利用の準備を進める）。また、親株床も更新する。

【疫病、萎黄病】

- 発病した苗は育苗床から除去し、周辺の苗も保菌の可能性があるので、絶対に定植しない。
- 定植後に発病株を確認した場合は速やかに除去し、予備苗による植え替えを行う。
- 育苗期に多発したところ（萎黄病では、発病が見られたところ）では、育苗株を親株とせず、無病の苗に更新する。また、親株床も更新する。

【うどんこ病】

- マルチ前後からビニル被覆後まで、定期的に予防散布を行う。
- 軟弱に生育すると発病・拡大しやすくなるので、注意する。

【ハダニ類】

- 高温（25～30℃）ほど増殖しやすく、葉数が多いと葉裏に薬剤がかかりにくいので、定植後の下葉除去後及びマルチ被覆直後に、しっかりと防除する。
- 天敵のチリカブリダニやミヤコカブリダニを使用する場合は、天敵に対して影響が長い農薬の使用を避ける。
- 葉裏に薬液が付着するよう十分な薬液量を散布する。

葉裏に薬液が付着するためには、散布液が細かな霧状になることが大切。古くなったノズルは取り替えること。

【ハスモンヨトウ】

- 防除効果を高めるために**速効性の薬剤と遅効性の薬剤（IGR剤）をローテーション**散布する。
- 中老齢幼虫になると薬剤の防除効果が低下するので、早期発見に努め、若齢幼虫（卵がかえって7日間程度、体長 1.5cm くらいまで）のうちに防除を徹底する。
- ほ場内や周辺の雑草はハスモンヨトウの増殖の場となるので除草を徹底する。

【アブラムシ類】

- 近年、アブラムシの被害が増えているので、発生初期からの防除を徹底する。
- ほ場周辺の雑草を除去する。

台風対策

台風の接近状況等を確認し、安全を確保したうえで対策を実施する。

(1) 事前対策

- 1) 施設周囲の作溝により、施設内への雨水の浸入を防ぐ。
- 2) 育苗床やハウス周囲の飛散しやすい物を撤去する。
- 3) 加温機の煙突を片づけ、また、オイルタンクの元栓は閉めて、本体が倒伏しないように十分固定する。
- 4) 遮光のため寒冷紗を設置しているところでは取り外す。
- 5) かん水チューブ等は取り外し片づけておく。また、頭上かん水施設は取り外すか、マイカ線等で固定する。
- 6) 定植前の苗は、コンテナに入れて安全なところに移動するか、寒冷紗等で被覆し四方を押さえる。
- 7) 定植準備が終了しているほ場では、地表面の被覆ビニルが飛ばされないよう固定する。

(2) 事後対策

- 1) 冠水や浸水したほ場は速やかに排水する。
- 2) 海岸近くでは潮風を受けたおそれがあるので、速やかに十分量の真水で付着した塩分を洗い流す。
- 3) 茎葉に付着した泥等は乾かないうちに速やかに真水で洗い落とし、その後、病害予防のため、農薬使用基準に基づいて、低濃度で殺菌剤を散布する。
- 4) 株を被覆していた寒冷紗等は、台風通過後、速やかに除去する。
- 5) 株冷中の苗で、停電が長時間となり冷蔵庫内の温度上昇がみられる場合は、庫外に出す。
- 6) 機器類（加温機、炭酸ガス施用機、ポンプなど）が浸水した場合には使用前に点検する。また、内部が十分乾燥してから電源を入れる。
- 7) 炭疽病の防除剤を散布する。

(3) その他

被害があった場合には、災害に対する補助事業が実施される場合に備えて写真を撮っておく。なお、写真は被害状況（浸水位置等）や機器類の型式がわかるように撮影する。

トピックス 健全な親株確保は良苗づくりの第一歩

－ 無病で害虫が寄生していない親株確保に努めましょう －

1 無病親株の確保

本年の育苗期では、炭疽病が多発しました。図4に示すように親株が感染していると、感染発病しやすい気象が続いた場合に多発します。育苗期は感染・発病しやすい条件に当たるので、多発すると防除は困難です。このため、発生を抑えるには**無病の親株を確保することが必要**です。育苗期に炭疽病が多発したところでは、**親株を更新**しましょう。

親株の潜在感染株率が高かった。
3～4月は、気温が高温傾向で、
まとまった降雨があったので、親
株で炭疽病の感染が拡大した。

5月上旬にまとまった降雨があり、保菌
した親株から子苗に
感染した。

感染した子苗が鉢上げ
され、6月下旬～7月上
旬の大雨で育苗床内で
感染が急拡大した。

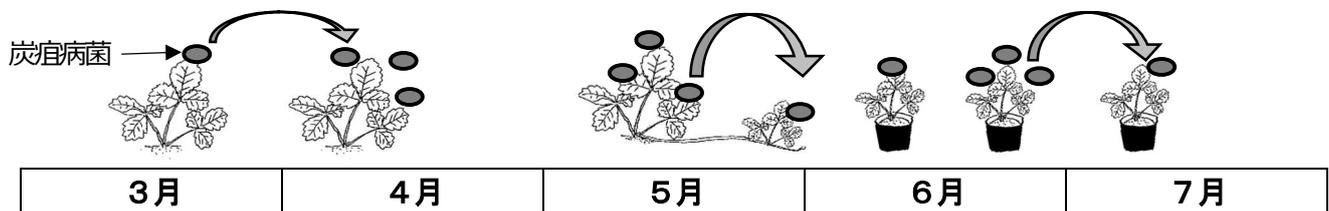


図4 本年における炭疽病の多発要因

2 親株植え付けまでの親株管理

10月に親株が植え付けられますが、9～10月には、親株とする苗を十分に管理していないところが多く見られます。健全な親株を確保するために以下のことに取組んでください。

(1) 炭疽病の防除

感染した苗を親株にすると、11月までは、親株間で炭疽病が拡大するおそれがある。特に、本年の9月は気温が高く、雨が多いと予想されているので、いつもの年より感染が拡大しやすいことが予想される。親株とする苗も定期的に防除する。

(2) ハダニ類の防除

イチゴに寄生したハダニ類は、野外では11月まで増殖する(図5)。親株で越冬したハダニ類は4月になると急速に増殖するので、翌年産のハダニ類の多発を防ぐために親株とする苗の防除を徹底する。

(3) 施肥

育苗末期の苗は、花芽分化操作のために窒素切れ状態となっている。植え付けまでは、ポットに追肥して生育を促進する。

(4) 株冷蔵

植え付け前に親株を冷蔵処理(5℃以下の低温に20～30日間程度)すると、春先のランナー発生が早くなる(早く植えつける株ほど長く冷蔵処理する)。

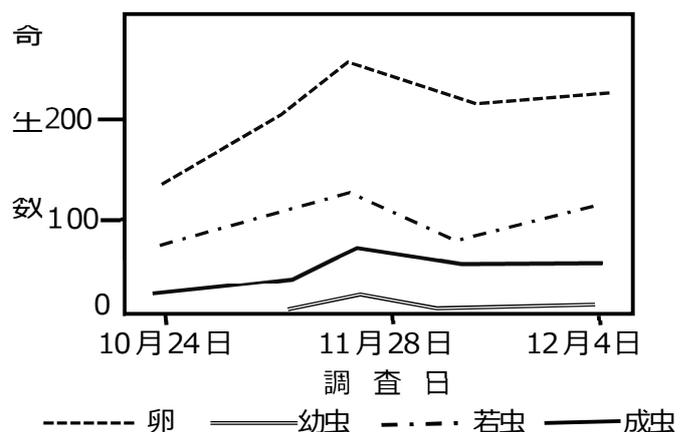


図5 野外のイチゴにおけるハダニの発生消長

(栃木農試研報No17を基に作図)

農薬の在庫管理に取り組みましょう

営農情報 130 号（令和 5 年 4 月 7 日）で、農薬の在庫管理について説明しました。本田に定植した後は農薬の散布液量が増え、それに伴い、農薬の使用量も増えます。また、収量や品質の低下を防ぐためにもいっそうの適期防除が求められます。必要な農薬を過不足なく準備し、適期を逃すことなく効率的な防除を行うためにも、農薬の在庫管理に取り組みましょう。

1 在庫管理に取り組むメリット

- (1) 農薬の在庫状況の確認により、在庫不足を防ぐことができるので、適期に防除できる。
- (2) 買い過ぎを防ぎ、期限切れ農薬などを減らすことができる。
- (3) 年間の使用量が見えるようになるので、予約注文する時に参考になる。
- (4) コスト削減による経営改善につながる。

2 在庫管理の実際（事例紹介）

実際に、農薬の管理に取り組んでおられる方にお話を伺いましたので、その内容を紹介します。

在庫管理に取り組むメリットは何ですか

以前、会社に勤めていた時に**在庫管理は商売の鉄則**であることを学びました。農業でもこれは同じことです。余った農薬は処分することになるので、ムダな在庫を抱えることは、不必要な出費を増やすこととなります。農薬だけではなく、肥料や資材を在庫管理するとコストを抑えることができ経営の向上に結び付きます。

在庫管理のポイントは何か

整理整頓です。どの農薬がどれだけ残っているか一目でわかるようにしておく、在庫管理簿を用意しなくても在庫管理をすることができます。私は、農薬を保管庫の中で奥に置かないようにすることで、見ただけで在庫状況がわかるようにしています。

農薬のラベルには使用基準が明記されています。ラベルをよく読み、必ず基準を守ってください

- イチゴに使用できる農薬であるか確認しましょう。
- 定められた希釈倍数より濃い濃度で使用してはいけません。
- 定められた時期以外に使用してはいけません。
- 定められた使用回数より多く使用してはいけません。育苗期、本ぽごとに回数が決められているものもあります。また、成分ごとの使用回数を超えないように注意しなければなりません。
- 使用方法が定められています。常温煙霧機で使用できる農薬は、使用方法欄に「常温煙霧」と表示されている薬剤のみです。
- 注意喚起マークが表示されている場合には、安全確保のため必ず守りましょう。

本資料中の農薬に関する記述は令和 5 年 8 月 23 日現在の登録内容に基づいています。